文部科学教育通信　2017年11月27日発行　第424号掲載

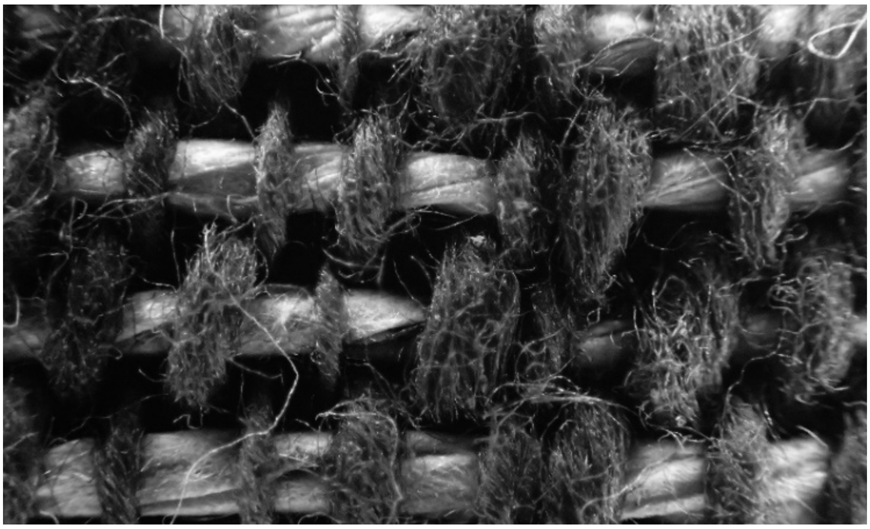
紙布（しふ）

紙の用途は、字や絵を書くためだけとは限らない。紙は包装紙にも、障子紙やふすま紙として部屋の内装用にも、あるいは紙衣や紙布として衣服にも利用することができる。紙衣はコウゾでつくった衣のことで、柿渋などを塗り、揉むことで破れにくくしている。一方、紙布は織物の一種である。経糸と緯糸ともに紙糸を用いたものを諸紙布、経糸に絹・綿・麻糸を使い、緯糸に紙糸を使ったものはそれぞれ絹紙布・綿紙布・麻紙布とよばれる。

紙を紙糸として糸のように使うことができるのも、和紙だからこその特徴をうまく活かしてのことである。流し漉きでつくられる和紙は、原料の繊維を長いまま使用している。繊維と水がまぜあわさった紙料（紙のもととなる原料）を漉桁にはさんだ漉簀ですくい、揺り動かし、反対側に余分な紙料を流し捨てる操作を繰り返すことで、紙の厚みをととのえていく。紙料に「ねり」とよばれる増粘剤を加えることで、長い原料繊維も水中でからまらず、均一に分散する。紙糸をつくるための紙は、漉桁の操作を前後の縦ゆりだけにすることで、繊維を縦方向にそろえるようにして漉く。これで、繊維方向に強靭な紙となる。このように漉かれた紙を、上下の端を残して繊維に沿う方向に細かく切り目をいれ、湿らせながら揉み、端を交互に離しながら全体を帯状にし、捩りをかけて紙糸とする。

国立民族学博物館は、紙布を九点所蔵している。そのうち五点は兵庫県氷上郡の手織り木綿（紙布）で、写真右から青と白の太い縞模様の反物、薄茶色と灰色混じりの反物、薄茶色の反物、濃紺と白混じりの反物、とそれぞれ趣がことなる。このうちのひとつ、青と白の太い縞模様の反物を拡大して観察すると、青色もしくは白色の経糸と、紙の緯糸でできていることが分かる。経糸は繊維を撚り合わせてできているが、その太さはまちまちで一定していない。緯糸は、ゆるく拠られた紙糸で、こちらも太さは揃っていない。経糸は、緯糸の上、そして下と、交互に浮き沈みするように織られている。経糸や紙糸の太さが異なることもあり、緯糸と緯糸の間には隙間ができ、目はつまっていない。見るからに風通しがよさそうで、紙布が夏の防暑着として重宝されるというのも納得がいく。（園田直子）

手織り木綿（紙布）（国立民族学博物館所蔵）



青と白の太い縞模様の反物の拡大図